

「人間の問い」が示すもの——真下信一とマルクス・ガブリエル
赤石憲昭（日本福祉大学）

去年は、真下信一の没後 35 年の年であった。真下信一の哲学を一言で表すならば、徹底した「ヒューマニズム」の哲学であると言うことができる。「ヒューマニズム」とは、人間が自由と愛と平等を求める存在であるということを普遍的な真実であると認める立場であり、このヒューマニズムと、「ヒューマニズムのまっとうな社会的な仕組み」としての民主主義（デモクラシー）の実現が、真下の主体的・実践的唯物論が生涯追求した課題であった。本報告では、この真下の「ヒューマニズムの哲学」の意義を、ドイツの哲学者マルクス・ガブリエルと対照させることによって際立たせてみたい。

ガブリエルは、そのインタビュー集である『世界史の針が巻き戻るとき：「新しい実在論」は世界をどう見ているか』（PHP 新書、2020 年）において、今現在、世界で起きている危機を 5 つ挙げ（①価値の危機、②資本主義の危機、③民主主義の危機、④テクノロジーの危機、⑤表象の危機）、その哲学的立場である「新しい実在論」の立場から、それに対する解決策を提示しているのであるが、その内容は、真下が人間を主題として行った数々の講演を収めた『自由と愛と』（青木書店、1985 年）や『君たちは人間だ』（新日本出版社、1983 年）で示される内容と、驚くべきことに一致する点が多い。

たとえば、ガブリエルは、①価値の危機において、人間が非人間化され、差別が横行している問題を取り上げ、「もし我々が皆、ヒューマニティ（人間性）に気づいていたとしたら、残忍な戦争を始められるはずがありません。真の本格的な戦争を始めようと思ったときに求められるのは、相手の非人間化（dehumanization）です。そうでなければ、相手を射殺することなどできません」（『世界史』68 頁）と述べているが、このことは、真下が「こういう点でヒューマニズムというのは、自分だけが幸せを求めているのではないということ、つまり、みんな同じ人間だ、ということをしっかり認め合うところにあります。ところが、いろいろな理由、しくみから、同じ人間だと思わないようになってゆくことがしばしば生じます。そういう差別の論理が戦争の論理につながってゆくのです。戦争屋が、あらゆる場所に差別をこしらえ、煽り立てるのです」（『自由と愛と』73 頁）と述べていたのと重ねられるだろう。

また、⑤表象の危機において、ガブリエルは、「現実」との対応を度外視し、「事実」かどうかは全く問題にせず、イメージだけで判断が行われてしまうという、いわゆるフェイクニュースの問題を取り上げて批判を展開している。リアルとフェイクの境界線が曖昧にされつつあるこの世の中で再度境界線を引こうとするのがガブリエルの「新しい実在論」であるが、このような「表象の危機」の状況は、真下が置かれていた治安維持法下の状況と重ねることができるだろう。すでに内務省の厳しい検閲を通っている雑誌『世界文化』にかかわって特高に検挙された真下は、その取り調べにおいて、特高左翼系の警部に「おまえはどうして『世界文化』という雑誌を出していた」と問われ、「戦争をやったり、大学の自由を圧迫したりするファッショ的傾向は真理に反する」と答えた歳に、「真理もへったくれもあるもんか！」とどなられたという（『君たちは人間だ』190 頁）。戦時中はまさにイメージだけの判断が横行した時代だったのである。

《第3分科会》
現代実在論

真下とガブリエルの哲学が見せる一致は、両者がともに、人間の普遍的価値を信じ、その本質である自由や、それを実現する社会の仕組みである民主主義の実現を目指すとともに、それを妨げようとするものに対して徹底的に闘った／闘っている哲学者であるということが関係しているように思われる。そして、その根底には、両者の、第二次大戦への深い反省が見られる。真下は、「『8・15』はむなしかった。そして『8・15』がむなしかったということは、戦争で流された血と涙のことごとくはむなしかったということであり、そして今後もむなしく血と涙は流されるかもしれぬということです。これを私たちはだまって見ているわけにはいきません」（『真下信一著作集』第5巻、230頁）として、民主主義の真の実現、「ほんとうの8・15」の成就を生涯の課題とした。また、ガブリエルも、もちろん、彼自身は戦争を経験したわけではないが、アウシュビッツを生み出した国の人間として、「人間とは何かという確固とした概念が必要とされているのです。なぜなら、人間の概念が揺らげば、次に待っているのは、収容所だからである。（中略）けっして、『人間とは何か』に疑いを持ってはいけないのです。同じ過ちを二度とくり返さないために」（丸山峻一＋NHK「欲望の時代の哲学」制作班『マルクス・ガブリエル：欲望の時代を哲学する』NHK出版新書、2018年、174頁）と「人間」の立場にこだわる。自然科学において、また、このコロナ禍の社会において、人間の価値がどんどん毀損されていく中、あらためて「人間」を強調するこの両者の哲学は、きわめて重要であろう。

ところで、真下がその主体的・実践的唯物論の立場を強調した背景には、敗戦後当時の唯物論が、人間いかに生きるべきかという主体性の問題にきちんと向き合うことができず、実存主義や無の哲学が浸透したという背景があった。ガブリエルの提示する「新実存主義」が真下の議論とどう関わるのかということについても、余裕があれば検討したい。

自己解釈する動物と真理——チャールズ・テイラーとマルクス・ガブリエル
坪光生雄（一橋大学）

本報告では、チャールズ・テイラーの解釈学的人間学と多元的な実在論との結びつきを明らかにしたうえで、その思想の特徴や意義をマルクス・ガブリエルの「新実在論」および「新実存主義」との比較のなかで捉えることを試みる。テイラーとガブリエルは、それぞれの提起する実在論の多元主義的な性格や、還元論的な自然主義の立場に対する批判などにおいて重要な論点を共有しているといえる。テイラーはガブリエルの思想に関して次のように評価している。「マルクス・ガブリエルは、すこぶるエレガントな論証を組み立てて、人間の生、思想、行為についての自然科学を基調とする還元論的説明の支配に風穴を開けてみせた。これは、私自身がこの数十年のあいだやろうとしてきたことでもある²」。

この自然科学的な還元論の批判という課題は、テイラーの初期の論考において「自己解釈する動物 (self-interpreting animals) ³」としての人間理解を中心に探求された。人間を説明するにあたって自然科学の方法を特権化する理論は、人間中心的な観点や用語を排除する傾向にある。テイラーによれば、これらの理論が見逃しているのは、人間が「自己解釈する動物」であるということ、人間の行為者としてのあり方が不可避免的に自己に関する解釈を含み、またその解釈によって自己が構成されるということである。こうしたテイラーの人間観はまた、行為者が行う自己解釈の一部には道徳的価値に関する「強い評価 (strong evaluation)」が必ず含まれるという、のちの『自我の源泉』の基本命題とも結びついたものである。「完全に人間的な行為者であるということ、日常的な意味で人格または自己であるということは、価値に関する諸々の区別によって定義された空間のなかに存在するということなのである⁴」。

人間についての理解を求めるといふ学問的探求も、人間が自らに行う解釈を考慮に入れなければならない。ということは、各人がそれぞれにおいて質的に区別する諸々の価値を無視する学問的態度は許容されないということである。こうしたことから、自然主義の方法が人間学にとって不適切とされる理由が理解される。「自己解釈においてのみ存在する存在は、絶対的な仕方では理解できない。そしてまた、諸々の価値の区別という背景に照らしてのみ理解しうる存在は、本質的に中立性を志向する科学の言語によっては捉えることができない。私たちの人格性は、有機体にアプローチするのとまったく同じ科学的なやり方では取り扱うことができないのである⁵」。

他方テイラーは、ヒューバート・ドレイファスとの共著『実在論を立て直す』において、「頑強で多元的な実在論」と呼ばれる彼の立場を明確にした。語彙や信念の外側に

² マルクス・ガブリエル『新実存主義』廣瀬覚訳、岩波書店、二〇二〇年、八〇頁。

³ Charles Taylor, "Self-Interpreting Animals," in *Human Agency and Language: Philosophical Papers 1*, Cambridge, New York: Cambridge University Press, 1985, pp. 45-76.

⁴ Charles Taylor, *Philosophy and the Human Sciences: Philosophical Papers 2*, Cambridge, New York: Cambridge University Press, 1985, p. 3.

⁵ Ibid.

真理の基準となるいかなる実在性をも想定しない整合主義的なものの見方に対抗して、テイラーとドレイファスは「私たちに対して現れる日常世界の事物への身体化された直接的アクセスと、私たちの身体能力や対処実践との関係から独立した宇宙の事物をそれ自体として記述する科学という実在論的な見方とを、両方とも擁護するための議論を立てる⁶」のだと言う。こうしてテイラーは、自然科学の記述は自然的実在それ自体に対応するものであるという主張を積極的に擁護するが、しかし同時に、そうした科学の記述が実在に関する唯一の真理を捉えているとは考えない。「多元的で頑強な実在論」は、実在との対応的な真理を確保しながら、それでいて同一の実在に関してしばしば食い違う把握や解釈の複数性を可能的に承認する。これは一元的に本質化された自然主義の真理観と、真理をたんなる整合性へと還元する「デフレの実在論」という二つの極端を避ける第三の立場として構想されたものである。

ガブリエルは、このようないわば極端と極端の間をいくようなテイラーの主張におおむね賛同している。自己解釈する動物としての人間理解は、すべての真理を自己決定的な自由へと明け渡す主観主義に結びつくわけではない。ガブリエルは次のように述べるテイラーの文を、自らの「新実存主義」の立場を適切に特徴づけたものとして承認する。「われわれがみずからを決定する動物であることは逃れようのない事実である。しかし、そうだからといって、われわれの自己解釈において真理がいかなる位置を占めるかという問題が解消するわけではない⁷」。しかし、両者のあいだには「世界」の全体性の想定に関して一定の緊張があるようにも思われる。この最後の点についても、本発表はテイラーの宗教思想との関連で論じる。

⁶ Hubert L. Dreyfus and Charles Taylor, *Retrieving Realism*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 2015, p. 132.

⁷ 『新実存主義』九〇頁。